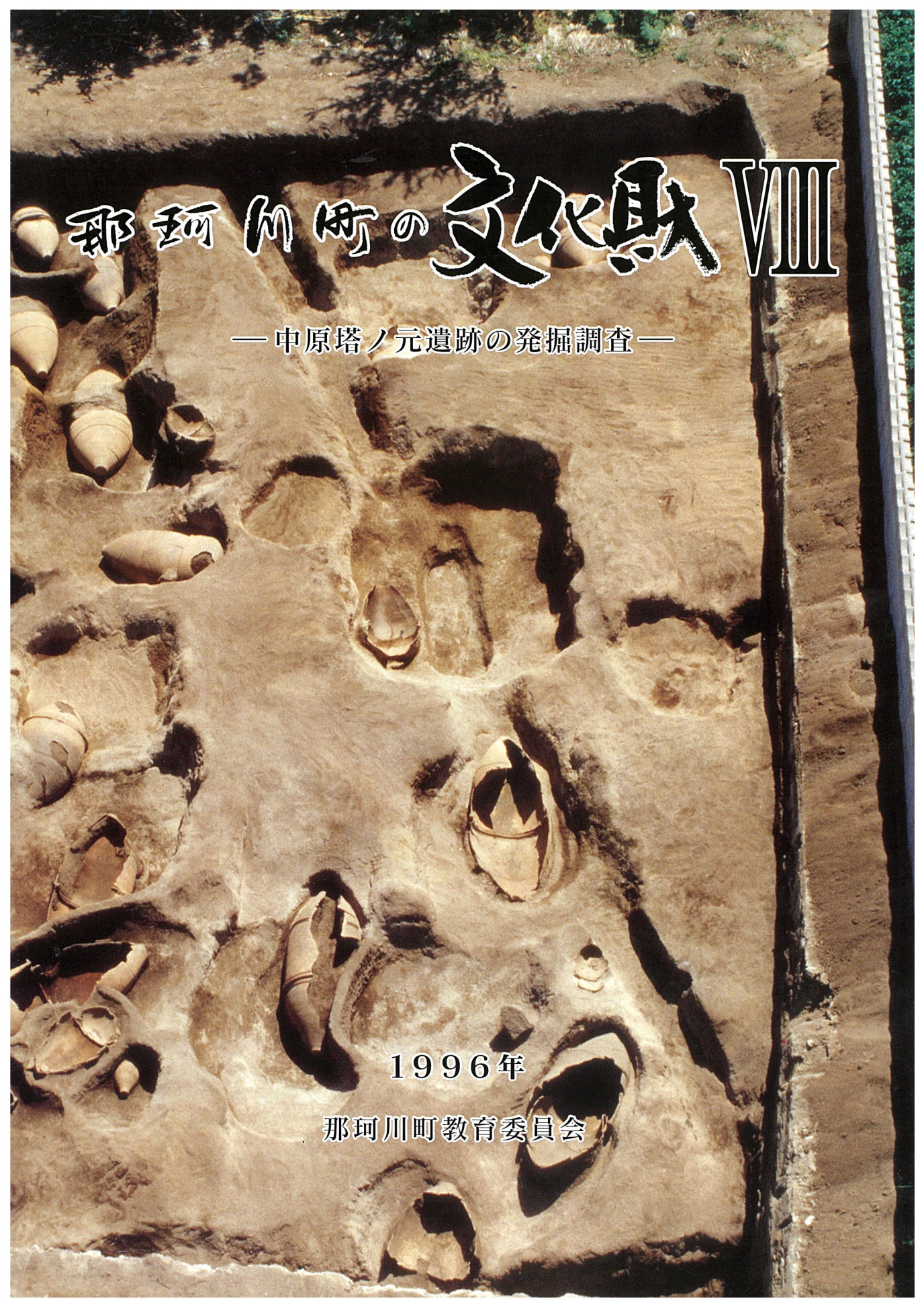




那珂川町の文化財 VIII

— 中原塔ノ元遺跡の発掘調査 —

1996年

那珂川町教育委員会

はじめに

私たちが住む那珂川町には、今も数多くの遺跡が眠っています。

近年の開発の増加に伴い、それらの遺跡は発掘調査され、郷土の歴史は少しずつ解明されてきています。

たとえるなら、永い時を越えて目覚めた遺跡は、先人から私たちに届けられたメッセージのようなもの。

それら過去からの声を多くの人に聞いていただきたく、教育委員会では毎年「那珂川町の文化財」という小冊子を発行しております。今回は平成6年度に調査した中原塔ノ元、カクチガ浦、山田西遺跡に、その声を聞いてみることにしましょう。



中原塔ノ元遺跡 (第1地点)

中原一帯に広がる大遺跡群の一面を調査したところ、竪穴式住居（たてあなしきじゆうきょ）が確認できました。住居内からは多量の土器が出土し、今から1600年前の人々がここで煮炊きをして暮らしていたことがわかりました。



◀住居跡から見つかった土器
家のすみから土器がまとまって出土しています。

復元された土器▶
破片で出土した土器は、つなぎ合わせてもとの形に復元します。

これらの土器の特ちょうを見て、私たちは住居が建てられた年代などを知ることができるのです。
(後方中央の土器の高さは24cm、前列右はしは7cm)



中原塔ノ元遺跡 (第2地点)



▲遺跡の西側



◀いろいろな棺の組み合わせ

左は甕(かめ)に鉢をかぶせ、下は甕と甕を組み合わせて棺(ひつぎ)として使っています。
(左の甕と鉢を合わせた長さは85cm、下は145cm)



同じ遺跡の中でも、ちがうところを調査したら、今度は弥生時代の甕棺墓(かめかんぼ)が見つかりました。

こちらが「墓地」なのに対し、先のは古墳時代の人々が暮らした「住まい」。同じ名前の遺跡でも、いろんな時代、いろんな種類の遺跡が地下には重なって残っているのです。

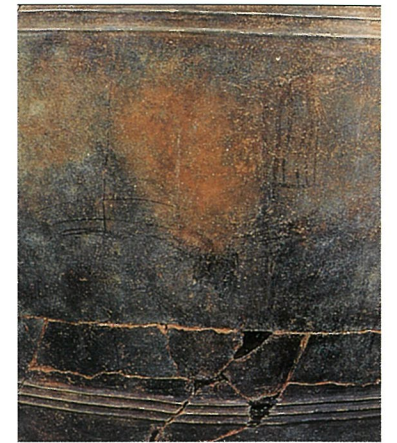
甕棺墓(かめかんぼ)とは？

甕(かめ)の中に死者を入れて埋葬したものを、甕棺墓といいます。時には甕だけでなく、壺(つぼ)や鉢(はち)を利用したものも見られます。

この埋葬方法は北部九州に集中して見られ、本町では中原の他に松木、片縄などで発見されています。それらの中には、玉や貝製の腕輪などの宝ものがおさめられた棺があり、すでに弥生時代には、宝をもって埋められる人と、そうでない人の差があったと考えられています。



▲甕棺のなかから見つかった貝製の腕輪
(観音堂遺跡群出土)



▲甕(かめ)の表面に、ヘラで描いた線画が残っています。一見落書きのようですが、よく目をこらして見ると、左の模様など、羽をひろげた鳥のようにも、弓矢のようにも見えてこないでしょうか。



死者をとむらう弥生の人びと
甕棺墓は口を合わせた二つの甕(かめ)の中に遺体を入れ、土中に埋める方法が一般的といえます。中には甕は一つで、その口を石や板でふさぐものもあります。

カクチガ浦遺跡群



遺跡の全景

カクチガ浦遺跡群は、松木字カクチガ浦一帯の丘陵上に広がる弥生時代から中世にかけての遺跡群です。特に標高40～60mの尾根上には古墳が点々と築かれ、現在までに16基の古墳が確認されています。

今回の調査で、古墳時代の築造と考えられる大型の石蓋土壙墓が見つかりました。



石蓋土壙墓(せきがいどこうぼ)とは？

地面に素掘りの穴を掘り、死者を埋葬したあと、石で蓋(ふた)をしたものをいいます。

右上の写真は、花崗岩(かこうがん)の板石で蓋をしたようすで、下はその蓋をとったあとのようすです。



山田西遺跡



▲さまざまな石器(せっき)

1～17は矢の先につけた矢じり。18・19は木や骨に穴をあける道具の錐(きり)。20～22は石斧(いしお)で、木を切るのに使われました。22は長さが10.5cmあります。



煮たきのようす



▲出土した深鉢 (高さ46cm)

山田字西・山城一帯に広がるこの遺跡では、今までに縄文時代と中世の生活跡を確認しています。前回の調査では、珍しい縄文時代晩期の集落と、木の実のアク抜きに使う灰を作ったと思われる炉跡が見つかり、本町の歴史のみならず日本史の始まりを考える上でも注目すべき発見となりました。その隣接地を調査した今回も、縄文後～晩期の遺物が豊富に出土し、遺跡の広がりを確認することができました。

那珂川町の文化財Ⅷ

—中原塔ノ元遺跡の発掘調査—

1996年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1

印刷：株式会社 三光

写真 中原塔ノ元遺跡第2地点(東側)

